

## 序

学長 山崎一穎

跡見学園の創立者跡見花蹊は、天保十一年（一八四〇）四月九日摂津国（大阪府）の木津村に父重敬、母寺田氏幾野の次女として生まれた。名を瀧野と言ひ、花蹊、不言と号した。跡見家は代々木津村の郷士として、幕末まで庄屋を務めた。

花蹊は十余歳にして画を石垣東山に学び、のち槇野楚山に学んだ。十六歳の秋、京都に出て頼山陽の門下生、宮原節庵（号は易安）について、漢学、詩文、書法を学ぶ。円山応立、中島来章に円山派の画を学んだほか、日根対山に南画を学んだ。二年後（一八五八）、父とともに大坂中之島に私塾「跡見塾」を開いた。傍ら山陽門下の後藤松陰について修学する。

安政六年（一八五九）八月、父が姉小路家の家扶となつて京都に移ると、花蹊は「跡見塾」の塾主となる。花蹊は慶応二年（一八六六）京都に移り私塾を開き、明治三年（一八七〇）十一月に上京する。

明治八年（一八七五）十一月、神田中猿樂町に「跡見学校」を開学する。東京における最初の私立学校である。明治二十一年（一八八八）一月、小石川柳町に移転し、昭和八年（一九三三）一月、文京区大塚の現在地に移転した。

跡見花蹊は大正十五年（一九二六）一月十日死去したが、花蹊の教育理念は、今日の跡見中学校、高等学校、女子大学短期大学部、女子大学、大学院へと具現化され、拡充発展をしてきた。

学祖跡見花蹊は、文久元年（一八六一）二十一歳から大正十四年（一九二五）八十五歳まで、全四十七冊の日記を残している。昭和五十九年（一九八四）女子大学は、明治以来の女子教育の中で跡見学園が果してきた教育の全容を解明するために根本資料である学祖の日記の解読に着手した。

学長は青木茂、岩田秀行、和田英道（故人）、のちに柴田光彦らの教授の諸氏に解読を依頼した。平成十四年（二〇〇二）六月、花蹊日記の出版に向けて、岩田秀行教授を座長に小池章太郎教授が加わり、再読、三読をして読みを確定する作業に入った。岩田、小池両教授の献身的な解読の結果、永く篋底に秘せられていた学祖の日記が、創立一三〇年という年に日の目を見ることになった。

日記の解読によって、花蹊一族、師弟、交友関係、また暮した土地の様子、時代の状況などが明らかになって来た。和宮様降嫁のお供をという話が周囲の反対によって取り

やめになったこと（文久元年）、江戸に下った和宮に画家花蹊は、姉小路家からの依頼を受けて絵の組物を描いたこと（文久三年）、姉小路公知の暗殺を大坂で聞き、京都の姉小路家に駆け付け、凶変の顛末を聞いたこと（文久三年）、（ええじゃないか）と踊る人々の踊りに巻き込まれたこと（慶応三年）など幕末から明治初年の大阪、京都での生活が詳述されている。

明治四十五年（一九一二）七月三十日明治天皇が逝去し、その大葬の日（九月十三日）に乃木希典、静子夫妻が自刃した。乃木大将の行為は、当時の知識人に衝撃を与えた。花蹊は新聞の号外の「乃木大将夫妻殉死」の記事に驚き、「如何に忠義といへと教育の重任をいたゞきて、何といたしたる事ならむ。絶叫したり。」と記している。乃木大将は学習院の院長として若人の教育にあたっていた。花蹊は死を選んだ乃木の行為を教育者としての責任放棄と見ている。花蹊の冷静な目に注目しておく。

跡見花蹊は教育者のみならず、画家、書家として名声を博した。花蹊の名が新聞に登場する最初は、明治六年（一八七三）一月の『新聞雑誌』（第七十三号）である。昭憲皇太后の御召しに預かり、画作、詠歌を差出したことが報じられている。英雄、偉人の小伝を掲載した雑誌『名誉新誌』の第十五号（明治十一年〓一八七八年一月）に「花蹊小伝」が掲載される。最初の略伝である。のちに「夫人の素顔―跡見花蹊」が、『報知新聞』（明治三十二年〓一八九九年二月二十四日〓三月十一日）に連載される。

さらに博文館が創業十周年（明治三十年〓一八九七）記念として、総合雑誌『太陽』（第三卷第十二号）に掲載の書画を斯界の著名人に依頼した。画家三十六人中女性は二人のみである。「夜景山水」を画く花蹊が選ばれている。創業十二年記念として、『太陽』は（明治十二傑）の臨時増刊号（三十二年六月）を発行した。これは全国の読者の投票によって選ばれた十二人の英傑である。花蹊は書家の部門で十二傑の中に名を留めている。

教育者として芸術家として、また学校経営者として多面的な活動を記述した花蹊日記の公刊の意義は大きい。

平成十七年四月

跡見学園女子大学 学長 山崎 一穎